



おじいさんからのメッセージ
~びわの木より愛をこめて~

frankincense

ある晴れた春の日の朝、
ぼくは、いつものように丘の上から、
朝日にキラキラ輝く銀色の海を眺めていた。

澄みきった暖かい空気を胸いっぱい吸い込みながら、ぐるりと辺りを見回すと、
陽だまりのような黄色い菜の花が丘一面に咲き誇り、
芽吹いたばかりのまだ小さな草花が、
太陽の光を独占しようと一生懸命背伸びをしていた。

ぼくは、丘の上に立つ小さな「びわの木」。

毎朝、朝日に輝く海を見るのが日課だ。

キラキラ銀色に輝く海は、
僕の心もキラキラ輝かせてくれる。
ぼくは、その日一日のエネルギーをそこからもらっていた。

ふと丘の下を見下ろすと、
いつもぼくのお世話をしてくれるおじいさんが、息を切らしながら、
休み休み、丘をのぼってきていた。

なんだか、少し苦しそう・・・。
いつもより、立ち止まる回数が多い気がした。

やっとぼくのところにたどり着いたおじいさんは、
にっこり笑ってあいさつをしてくれた。

「おはよう」

ぼくは、おじいさんのこの顔を見るだけで、幸せな気持ちになるんだ。

「おじいさん、おはよう。」

僕も、にっこり笑ってあいさつをかえした。

「なんだか、すこし苦しうさだけど、大丈夫？」

ぼくは、いつもと違うおじいさんの様子が心配になって声をかけた。
おじいさんは、笑って元気に答えてくれた。

「もう、かなりの歳なんじゃから、この坂道は、そりゃあ、疲れるさ。
だけど、大丈夫じゃよ。」

おじいさんのその言葉を聞いて、ぼくは、少し安心した。

そしておじいさんは、ぼくのそばに来て、
体をやさしく撫でながら言った。

「今年もおいしいびわの実を頼むよ。
大きくなかったっていい、とびきり甘い実を頼むよ。」

いつもにもなく、念を押すおじいさんを不思議に思ったぼくは、尋ねたんだ。

「誰かにあげるの？」

すると、おじいさんは、
しわくちやの顔をもっとしわくちやにして、

「そう。遠くで働く孫娘たちに送ってやるんじゃ。」

と答えてくれた。

「お前の大切な実が、虫や鳥に食べられんように、袋をかけておこうな。」

おじいさんは、そうって、ぼくの大切な実たちに、
一房一房、ゆっくりと袋をつけはじめた。

おじいさんは、孫娘たちの喜ぶ顔を想像して、とても幸せそうだった。

おじいさんは、孫娘たちのことをとても愛しているんだなあ、って思ったら、

ぼくの心は、幸せな気持ちでいっぱいになった。

ぼくは、心いっぱいの幸せな気持ちを、まだ、小さくて固い実のひとつひとつに届けた。
あふれてくる優しい気持ちを一生懸命届けたんだ。

袋をかけ終わったおじいさんは、
ぼくの体をやさしく ぽんぽんっとたたいて、にっこり笑った。

「それじゃ、よろしく頼むよ。」

おじいさんの目は、とても優しくかった。
そのときぼくは、おじいさんが、ぼくのこと大切にも思ってくれていることを感じたんだ。

ぼくは、おじいさんが大好きだった。
だから、すごく嬉しかったんだ。
ぼくは、この気持ちを大きく膨らませたくて、暖かい春の空気を胸いっぱいに吸い込んだ。
丘一面に咲いている菜の花の香りや、芽を出したばかりの小さな草花たちの香りが
ぼくのことを優しく包んでくれるような気がした。

そうして、幸せな気持ちは、胸いっぱいに膨らんだ！

ぼくは、それをまた、大切な実たちに届けたんだ。
実たちも、嬉しそうで、ほんの少し大きくなった。

ぼくは、どうやってここにやってきたのか、覚えていないけれど、
まだぼくが、小さな小さな木で、実なんかつけることなんてできない頃から、
おじいさんは、毎日のようにやってきて、にっこり笑ってあいさつをしてくれた。

「おはよう」 って。

ある日、おじいさんは、小さくて細いぼくの体が、
折れたり、倒れたりしないように、棒を立てて支えてくれたんだ。
なんだか、ちょっと自分が頼りなくて、情けなく思ったぼくは、おじいさんに言った。

「おじいさん、ぼく、早く一人で立てるようになりたいよ。
そして、空をつかめるくらい高く枝葉を伸ばして、大きな大きな実をつけたいな。」

すると、おじいさんは、ぼくの中の不安を見抜いたようで、にっこり笑って言ってくれた。

「そんなに、あわてなくても大丈夫じゃよ。
今は、枝葉を伸ばすことよりもそして、大きな実をつけることよりも大切なことがあるんじゃ。
そのために、支えが必要なときなんじゃよ。」

「枝葉を伸ばすことよりも大きな実をつけることよりも大切なこと？」

ぼくは、それより大切なことがあるなんて、思いもしなかったから、
おじいさんが何を言いたいのが、よくわからなかった。

「そう。どんなに枝葉を伸ばしても、そして、大きな大きな実をつけても、
ここが育ってないと、すぐに倒れてしまうんじゃよ。」

そう言って、おじいさんは、ぼくの足元をぼんぼんとたたいた。

「ここ？」

「そう、ここじゃ。根っこじゃ。」

「根っこ・・・？」

ぽかーんと足元を見つめるぼくを優しく見つめながら、おじいさんが言った。

「根っこは、土の中で見えないけれど、とても大切なところなんじゃ。
お前の体を支え、心を支えてくれる。」

そして、体に水と栄養を、心に大地の偉大なエネルギーを運んでくれるんじゃ。根っこが大きく育てば、自然と体も大きくなるし、実もつけることができるさ。だから、今は、根っこを大切に育てるんじゃよ。」

「ふーん。そうなんだ・・・。」

ぼくは、足元を見つめながら、まだまだ小さい自分の根っこを感じてみた。

なんだか、ひんやり冷たかった。

「でも、おじいさん。根っこは、どうやって育てたらいいの？」

ぼくの素朴な質問に、おじいさんは、なぜか大笑いした。

そして、こう言ったんだ。

「そりゃあ、わからんよ。わしには・・・。
わしは、びわの木ではないからなあ・・・。
それは、お前が自分で考えて、色々やってみなきゃ。
色々やってみることで、育っていくのかも知れんなあ・・・。」

「ええー。おじいさんがわからないなんて・・・。そんな～。」

ぼくは、とても大きな宿題をもらったような気がして、なんだか、気が沈んでしまった。

でも、そんなぼくを励ますように、おじいさんは、やさしく言ってくれたんだ。

「大丈夫。お前は、心のどこかで、どうしたらいいのかを、ちゃんと知っているんじゃよ。だから、ただ心で感じたこと、浮かんできたことを大切にしてやってみればいいんじゃよ。わしも、ちゃんとそばで見守ってやるから、安心して、ゆっくり育てていけばいいさ。」

おじいさんの言葉をきいて、ぼくは、心が少し軽くなった。

おじいさんに言われて、心のどこかで感じたんだ。

根っこを育てるのにどうしたらいいのか、
ぼくは、ちゃんと知っている・・・って・・・。

ぼくの日課が始まったのは、それからだった。
心に浮かんだことを、実行してみたんだ。

朝、キラキラ輝く銀色の海を眺めながら、
体いっぱい、朝日のエネルギーと波の上で踊る光のエネルギーを吸い込むと、
ぼくは、それを、根っこへ送った。
エネルギーをもらって、元気になった根っこは、
大地のエネルギーをたくさん受け取って、それを枝葉に届けてくれた。

ぼくは、この前やったように、土の中の根っこに意識を集中させてみた。
根っこは、真っ暗な土の中をおそろおそろ前へ進みながら、
未知の世界を手探りで開拓しているようだった。

そうやって、僕の根っこの開拓が進む中、
おじいさんは、毎日のように僕のところにやってきては、
身の回りのお世話をしてくれた。
そして、いろんな話をしてくれたんだ。

おじいさんの若い頃の話。
戦争に行ったときのこと。
この話は、ちょっと苦しかったな・・・。

それから、家族のこと。
すごく、大切なんだって。
たくさん迷惑をかけてしまったんだって。
おじいさんが、迷惑をかけるなんて、
想像したことなかったから、びっくりしたんだ。

ほんとにたくさんのお話をしたよ。
話をしながら、ぼくは、おじいさんから、たくさんのお話を教えてもらったんだ。
不思議なことに、おじいさんと話して、大切なことを感じたり、
色々なことを考えたりすると、必ず根っこが成長するんだ。
おもしろいでしょ？

だから、ぼくの根っこは、どんどん広く、そして深く深く伸びていった。

根っこが大きくなると、自然と枝葉も伸びるんだね。

おじいさんが言ったとおりだ。

ぼくの体は、いつの間にか大きくなっていった。

おじいさんが立ててくれた、支えも必要ないくらいにね。

そして、やっと少しずつ、小さな実をつけることができるようになった。

今のぼくがあるのは、おじいさんのおかげなんだ。

ぼくは、おじいさんが大好きになった。

ぼくにとって、おじいさんは、たった一人の家族なんだ。

大好きなおじいさんがいたから、そばで見守ってくれる家族がいたから、

ぼくは、こうして大きくなれたんだ・・・。

おじいさんに初めて袋をかけてもらって、うれしくなったぼくは、

かなり長い時間、昔の思い出に浸っていた。

そして、改めて、おじいさんが大好きだってことを実感したんだ。

おじいさんが帰ってからも、おじいさんとの思い出が浮かんで来ては、

懐かしく思ったり、うれしくなったりしながら、毎日を過ごしていた。

いつもはこんなに、思い出に浸ることなんてないのに、

不思議だなあ・・・と思いながら・・・。

そして、数日たったある日、
ふと、ぼくは、あることに気がついた。

そういえば、袋をつけてもらったあの日から、ぼくは、おじいさんを見ていない。
何日もおじいさんの姿を見かけないのは、今までになかった。

「おじいさん、かぜでもひいちゃったのかなあ……。
あの日、調子が悪そうだったし……。」

ぼくは、なぜだか妙に落ちつかなかった。
毎日丘の下を見下ろしては、おじいさんの姿を探したけれど、
おじいさんを見つけることはできなかった。

ぼくは、だんだん心配になった。
なぜか心が、どんより重くなってきたんだ。

ぼくの心配を映すかのように、空はずっと曇ったままで、
海鏡は、そんな鉛色の空を映して、ぼくの心を余計に暗くした。

それからまた数日たったころ、いつものように丘の下を見下ろすと、おじいさんの家に黒い服を着たたくさんの人たちがあわただしく出入りしているのが見えた。

「何事だろう・・・。」

みんなとても暗い顔でうつむいている。

おばあさんが泣いている。

お父さんも、お母さんも、孫娘たちも泣いている・・・。

「・・・まさか・・・！？」

突然、頭をよぎった直感が・・・ぼくの心を打ちのめした。

「おじいさんが、死んでしまった？」

おじいさんが、死んでしまった？

大好きなおじいさんが？

たった一人の家族だったのに？

ぼくは、頭の中が真っ白になった・・・

何がなんだか、何が起きているのか全くわからない。

重い稲妻が、僕の心を切り裂いた。

息ができなくて、痛くて痛くて、どうすることもできなくなった。

心が痛くて痛くてどうしようもないのに・・・涙は出てこない・・・

ただ、あの稲妻と一緒に何やら大きくて重いものが、ズシッと落ちてきて僕の中に腰をおろした

。

そして、そのまま・・・

ぼくは真っ暗な闇に落ちていった。

そこで、ぼくの中の時間は止まってしまった・・・。

おじいさんがいなくなってしまうしてから、どれくらいの時間が経ったのか、もう、ぼくには、まったくわからなかった。

ただ、ぼくの中の時間は止まってしまっても、ぼくの外の時間は、いつもと変わらず、当たり前のように進んでいった。

おじいさんは、死んでしまって、もう、ここにはいないのに、お日さまは、毎日変わらず顔を出しては、海をキラキラと輝かせていた。なぜか、それが納得できなかった・・・。
おじいさんがいないのに、すべてが今までどおりなのが、どうしても受け入れられなかった。

そしてある時、あの日、心の中に腰を下ろした大きくて重い何かが、突然暴れだして、ぼくの心は、傷だらけになった。

痛くて、痛くて、涙が出てきた。

寂しくて、寂しくて、涙が出てきた。

おじいさんに、会いたくて、会いたくて、涙が止まらなかった。

ぼくは、もうずっと、大切な実たちに栄養を届けるのを忘れていた。

・・・いや、忘れてたんじゃない。

「届けなきゃ」と思っていたけど、どうしても、できなかつたんだ。

代わりに、ぼくいっぱい悲しみを届けてしまっていた。

このままじゃ、おいしい実なんて、できないよ・・・。

わかっているのに、自分では、どうすることもできなくて、

悔しくて悔しくて、また涙が出てきた。

枝葉も、実も、心も、枯れてしまうんじゃないかって思った。

でも、ぼくは、それでもよかった。

ぼくのことを大切に思ってくれる人が、もういないんだと思ったら、

ぼくなんて、ここにいる価値がないんだって、本気で思ったんだ・・・。

あの朝、おじいさんが、いつもより苦しそうだったとき、

どうして、気づいてあげなかつたんだろう・・・。

無理して、袋かけなんかしないように、ぼくがちゃんと言っていれば、

もしかしたら、おじいさん、まだ元気でいたかもしれない・・・。

そう思ったら、ぼく、自分のことが許せなかつたんだ。

ぼくの中のあの大きくて重い何かが、あの朝のぼくを、ずっと、ずっと責めてくる。

苦しくて、苦しくてどうすることもできないぼくは、ただ、ただ、泣くしかなかった。

あの時落ちてしまった真っ暗な闇の中で、ぼくは、ずっと泣いていた。

毎日毎日泣いて、そして、泣きつかれて眠りについた。

それがぼくの日課になってしまった。

今日もまた、同じ一日が始まる・・・。

ぼくは、いつものようにそっと目を開けた。

「・・・？」

なんだかいつもと様子が違う・・・。

目の前には、見たこともない景色が広がっていた。

天気が悪くて、霧も出ているから、

先のほうまではよく見渡すことができないけれど、草原が広がっているような気がした。

「ここは・・・どこ？」

そう自分自身に語りかけた瞬間、信じられない声が聞こえてきた。

「ここは、お前の心の中の世界だよ。」

「?!」

それは、おじいさんの声だった。

死んだはずのおじいさんの声・・・。

ぼくは、深い霧の中におじいさんの姿を探した。

「わしは、ここじゃよ。」

おじいさんがそう言うと、深い霧がさっと消えて、目の前に、おじいさんと・・・

そして、どこまでも広がる美しい緑の草原が現れた。

「おじいさん??」

ぼくは、信じられなくて、おそるおそる聞いてみた。

「そうじゃ、わしじゃよ。」

お前が、あまりに自分を責めておるから、大切なことを伝えに戻ってきたんじゃ。」

「大切なこと？」

「そうじゃ、大切なことじゃ。
これから、わしと一緒にあるところに行こう。
そこには、お前にとって大切なものがある。
それを、お前に見てもらいたいんじゃ。」

おじいさんにまた会えたうれしさを、かみしめる間もなく、ぼくは、ちょっといじけてしまった。
。一緒に行くって・・・ぼくが一緒に行けるわけないじゃん！！

「おじいさんと一緒に行く？
おじいさん、ぼくびわの木だってこと、忘れちゃった？
ぼくは、動けないんだよ。ここから。だから一緒には、行けないよ。」

いじけたぼくに、おじいさんは、優しくこういった。

「動けるさ。お前が動こうと思えば。」

「ここは、お前の心の中の世界なんだよ。
ここにいるのは、お前の体じゃなくて、『意識』だけさ。
『意識』は、自由だからね。
お前の意思しだいでどこへだっていけるんだよ。」

おじいさんのこの言葉をきいて、
何のことも、よく分からなかったけれど、
とにかく、自由にどこへでも行けるってことみたいだったから、ぼくは、試してみようと思った。
。

おじいさんは、ぼくの前を歩き出した。

そして・・・。

ぼくは、その後についていった。

そう・・・歩いて・・・。

しばらく行くと、おじいさんは立ち止まって、
ぼくに、丘の上を見るよう促した。

丘の上には・・・木が立っている。
ぼくはゆっくりとその木に近づいていった。

その木に近づくと、ぼくはびっくりした。
その木は、なんと・・・ぼくだ！！

ぼくよりかなり小さい気がしたけれど、
紛れもなくその木は、びわの木で、そのびわの木は、ぼくだった。
だけど・・・。
かなりやつれて元気がない様子・・・。

「そりゃそうさ。おじいさんがいなくなっちゃったんだもの」

ぼくは、自分に言ってあげた。
おじいさんがいなくなってからの自分を感じて、胸が痛くなった。

「こんなにやつれちゃって・・・」

そして、おじいさんがしてくれたみたいに、
ぼくは、そのびわの木の体を優しく撫でてあげた。

やつれたびわの木を撫でながら、ぼくは、おじいさんを見た。

「抱きしめてあげなさい」

おじいさんが優しく言った。

ぼくは、おじいさんが言うとおりに、びわの木のぼくを、ぎゅっと、抱きしめた。

抱きしめた瞬間、ぼくの間からは、たくさんの涙があふれてきた。
心の中に腰を下ろしていたあの黒くて重い何かが、
また、暴れだしたのかと思ったけれど、今度の涙は、ちょっと違った。

その涙はあったかくて、ゆっくりと心の中の何かを溶かしていつてくれているような気がした。

それでも、僕の中の悲しみは、やっぱり消えてはくれなかった。
痛みも、苦しみも、とけていつてはくれない。

だけど・・・。

突然いなくなった、おじいさんへの怒りと、
自分自身をずたずたに傷つけ、ぼくを責め立てるあの黒くて重い何かは、
ゆっくりとゆっくりと、溶けていつているようだった。

「ねえ、おじいさん・・・」

「なんだい？」

「どうして、何もいわずにいなくなっちゃったの？」

「お別れができなくて、すまなかったな。
わしも、こうなるとは思ってなかったんじゃ。
また、元気に家に帰れるとおもっとったから。」

「おじいさんも、悲しくて苦しい？」

「死ぬ前が一番悲しくて苦しかった。
死ぬことを受け入れられなかったんじゃ。
あまりに後悔が多すぎて、もう一度やり直したいと思うたんじゃ。
じゃがな、病院のベットに集まってくれた、家族の顔を見ていたら、ありがたいと思うた。
この家族でよかったと。
こうして死を迎えられることを幸せに思ったんじゃ。
死を目の前にして初めて、
今ここにいるありのままの自分自身を受け入れることができたのかもしれんなあ・・・」

「ぼくは・・・。

ぼくは、おじいさんが死んでしまったこと、どうしても受け入れられない。
悲しくて、苦しくて、さみしくて、ただその気持ちだけがあふれてきて、前に進めない。
僕の中の時間が、完全に止まってしまったんだ。
このままじゃ、美味しい実なんてできないよ・・・。
それがまた、自分で情けないんだ。」

「今は・・・。

時間が止まってもいいんじゃないよ。
その悲しみと、苦しみと、寂しさをギュっとだきしめてやるために・・・。」

おじいさんは、そうって優しくぼくを撫でてくれたけど、
ぼくには、心のどこかにずっとずっと抱えていた大きな疑問があった。

ぼくは、こみ上げてくる怒りに似た気持ちを抑えながら、それをおじいさんにぶつけた。

「おじいさん、ぼく、わからないよ。

今は、こんなに近くで話しているのに、
夢から覚めると、もうおじいさんには、会えないんでしょう？
おじいさんは、いったいどこにいったの？
死んでどこに行っちゃったの？
どうして、ぼくや大事な家族を残して、遠くに行っちゃうの？」

おじいさんは、優しく静かに答えてくれた。

おじいさんは、優しく静かに答えてくれた。

「わしらは、死んだあと、
とても安らかで心地よい目に見えない形のないの世界に旅立つ。
わしらは、死ぬ時に目に見える形あるものは、すべて手放さにゃならん。
もって行きたくてももって行けないんじゃな。

大切な家族も、愛しい恋人も、
汗水たらして稼いだ金も財産も、地位も名誉も・・・。

目に見える形あるものを手放して初めて、
目に見えない形のないものを、まだ自分が持っていることに気づくことができる。

自分の魂がもっている、痛みや怒り、恨みや憎しみ、嫉妬、悲しみや苦しみ・・・。
自分自身に課している制限や自分を不自由にしている価値観・・・。
それらはみんな、色んなものへの執着なんじゃ。
わしらは、こちらの世界に来て、自分が手放すことのできないそれらの執着とじっと向き合う。

自分のもっている執着と向き合うっちゃうのは、たいそう困難な作業なんじゃがな、
わしらのいるこちらの世界は、深い愛で満たされていて、
わしらは形はないが、今ここに存在していることに幸せと喜びを実感できるんじゃ。

そうするとな、ほんの一瞬思い出すんじゃ・・・。

すべての執着を持つ前の自分がなんだったのかを・・・。

そう、わしらはみんな、
お前もお前の仲間たちも、わしの大切な家族も仲間たちも、
たくさんの執着にがんじがらめになる前は、みんな同じものだったんじゃ。
それを、ほんの一瞬思い出す。」

ここまで一気に話していたおじいさんが、話を止めて、
びわの木の体を撫でながら、優しい目でぼくを見つめた。

「・・・ぼくたち、もとはなんだったの？」

待ちきれずにぼくは、おじいさんを急かした。
おじいさんは、
優しく、そして力強く、深く低い声で言った。

「もとは、わしらは・・・
愛そのものじゃった。」

「・・・？」

ぼくは、おじいさんが言っていることが全く分からなかった。
それが、おじいさんの死とどう関係があるのか、
なんだか、話がどんどん離れていっているような気がした。

だけど、おじいさんの話は、なぜか、ぼくの心をひきつけて放さなかった。

おじいさんは、静かに話を続けた。

「愛は、すべての存在の本質じゃ。

愛は、優しく、すべてを慈しむ。

愛は、自由で制限されることなく、どこまでも広がっていく。

愛は、すべてを受け入れ、許す。

愛は、すべてをひとつにする。

境界線は、必要なくなり、すべてを共有することじゃ。

愛は、歓びと感謝ですべてを満たす。

愛は、無限の可能性を秘め、創造性にあふれ、豊かさを配給する。

愛は、波でもあり粒でもある。

愛は、本来波のように広がりすべてを満たす。

愛が、粒になるとわたらの魂になるんじゃ。

なぜ、波が粒になるのかは・・・今はわたしにも分からんのじゃが・・・。

目に見えるものも、見えないものも、

すべてを手放すことができた愛の粒は、すべてのものから自由になる。

意識はどこまでも果てしなく広がっていくことができる。

歓びと感謝に満たされ、優しさと慈しみをもって、

ありのままの自分自身を受け入れ、許す。

すると、自分以外のものも、あるがまま、すべてを受け入れ、許すことができる。

そして、自分と他のものとの境界線がなくなる。

すべてを共有し、自分自身をも共有する。

そうして、わたらは愛そのものに帰るんじゃ。

愛の粒は、愛の波に帰っていくんじゃ。

愛の波は、無限に広がり、すべてを満たしている。

わたらのいる形のない世界も、

お前のいる形のある世界も、

他のわたらの知らんたぐさんの世界も・・・。

すべてを満たして、ただ存在している。

そう、ただ存在しているだけなんじゃ。

わしらが、

目に見えて形のある世界と、目に見えなくて形のない世界とを
生まれたり死んだりしながら、行ったり来たりしているのは、
それぞれの世界で、自分を癒し、色んな執着を手放して、
愛の粒という小さな小さな自分という殻さえも手放して、
愛の波に帰っていくためなんじゃよ。

愛の波に帰った時、

わしらには、存在する意味も目的も必要なくなる。

愛は、すべてを受け入れ、ただ存在しているだけじゃ。

ただ存在しているだけで、歓びと感謝に満たされる。」

おじいさんは、とても幸せそうな顔で、ゆっくりと優しく話していた。
まるでもう、愛の波に帰ったかのように、満たされた顔で話していた。

「おじいさんは、もう、愛の波にかえっちゃったの？」

おじいさんの満たされた顔を見て、ぼくは、気がつくそう聞いていた。

「いいや。わしにもまだまだ、手放すものが、たくさんあるからな。
じゃが、ようやく目が覚めたような感じじゃ。
長い夢から覚めて、やっと現実を見たからな。
しばらくしたらまた、おまえたちの世界へ生まれてくるんじゃ。

わしは、形のない世界で、
自分の中の何を手放すのか、どうやって手放すのか、
すべてを自分で決めて生まれてくるんじゃ。
自分の責任の下、手放すために一番いいタイミングと、そして、家族を選んで生まれてくる。

死んでから形がなかったわしも、
こちらの世界では、目に見えて手で触れられる入れ物の中に入る。
そして・・・。
せっかく、目覚めて思い出したのじゃが、そちらの世界にいけばまた、
本当は自分がどこまでも無限に広がっていくことのできる愛そのものだ、ということも、
愛そのものに帰っていくためにはすべてを手放す必要があるということも、
そのために生まれてきたことも、忘れてしまう。
自分が愛そのものだということを忘れてしまうと、
自分の存在を信頼することができなくなってしまうんじゃ。だから・・・」

「だから？」

「ここに存在してもいい、存在する価値が自分にはあるんだと、
自分で確認したり、人に証明したりする必要がある。
自分の存在に、目的や意味が必要になるんじゃ。
そのために、わしらは、形のあるものを所有するし、何かを成し遂げようとする。
誰かに愛されたいと思うし、誰かを愛したいと思う。
誰かに必要とされたいと思うし、誰かを必要とする。
生きる目的や意味を探し求めるし、自分に課せられた使命を追い求める。

みんな、自分の価値を、形あるもので確認しようとする。

それは、大切な方法なんじゃ。

幸せを感じたり、喜びを感じたりするのも、愛されていることを実感するのも、形があったほうが、感じやすいから。

そのために、この形ある世界をわしらは自分たちで作るんじゃ。

みんな、自分の世界を作って、その中で生きとる。

そして、みんな自分が作った世界の中で、

愛の波に帰るための気づきと癒しを体験しておるんじゃ。

わしらは、その形ある世界で、自分の魂がもっている悲しみや苦しみ、怒りや恨み、憎しみ、嫉妬、自由を奪っている自分自身の制限・・・色んな執着を形あるものを使って、確認する。

つまり、

形あるこの世界で起こるすべての出来事は、

それらに気づき、それらを受け入れ、許し、それらを癒していく・・・。

そのためにあるんじゃ。

それらを、いつどんな出来事で気づくか、どうやって、受け入れ癒していくのか、わしらは自分で決めて生まれてきた。

形あるこの世界で、そうやってわしらは、

少しずつ、少しずつ、魂の奥にもっているたくさんの執着に気づいていくんじゃ。

そして、形ある自分を信頼し大切にしていな・・・楽しいことをしてやったり、

幸せだなあと思えることをしてやったりするんじゃ。

そうすると、わしらの奥深くにある悲しみや苦しみ、怒りや憎しみが癒されていく。

そしたら・・・

わしらの魂が必要としていた殻や仮面や制限や執着は必要なくなって、解け去っていくんじゃ。

そして、わしらの魂は、どんどん自由になっていく。

つまり、もっている執着に気づくために形あるものが必要で、

それらを受け入れて、癒していくために、形あるものが必要なんじゃ。

じゃからわしらは、

すべてを忘れて、この世界に何度も何度も生まれてくる。

そうやって、何度も何度も生まれ変わって、一つ一つゆっくりと癒していっていきとな、

形あるこちらの世界でも、だんだんと思い出してくるんじゃ。

自分が愛の粒で、愛の波へと帰っていくために、今ここにいるということを……。

こちらの世界では、自分で自分を苦しめる必要は全くない。修行なんて必要ないんじゃ。タダでさえ、苦しい思いをするのじゃから。

ただただ、ありのままの自分を許して、優しく労わって、自分が心から幸せであるためにすべての選択をしてあげればいいんじゃよ。」

長い長いおじいさんの話を、ぼくは自分がびわの木だということも忘れて聞いていた。全てが分かったわけではないけれど、ぼくは、おじいさんの言っていることをなんとなく知っていた。それを、一生懸命思い出そうとしている自分に気がついたんだ。

「おじいさん、ぼくはびわの木だけど、おじいさんがいっていること心のどこかで知っている気がするんだ。なぜだろう……。」

「そりゃ、そうじゃろう……。
人も、木も、動物も……みんな一緒さ。
みんな虹色に輝く愛そのもの。
身にまとった殻が違うだけの話なんじゃから。
『びわの木』っていうアイデンティティさえもいつかは消えてなくなるさ。」

「……そうなの？」

「そうさ。
わしもお前も、わしの家族も友人も、お前の美しい仲間たちも……
もともとは、みんな同じ愛の波じゃった
それが、愛の粒になった時、一番最初にまとった小さな小さな殻が、違っただけじゃ。
みんな、違った形を持って生まれて、それぞれのプロセスの中で、自分を癒していくんじゃ。
そして、愛の波に帰ろうとしておる。」

わしらは、痛みや悲しみや苦しみ、怒りや恨みを増やしてしまうことのほうが多いが、それでも、あきらめずに、みんな自分を癒している。
みんな元は同じ、どこまでも無限に広がっていく愛なのだから、誰かが癒されれば、自分も癒され、自分が癒されれば、どこかの誰かも癒される。

そうやって、みんなが、自分自身を癒しながら、たくさんの人を癒してるんじゃ。」

「だからな、びわの木よ・・・。

お前は、自分の中の痛みと悲しみを、ゆっくりと癒していけばいい。

お前の傷が癒されるごとに、わしも、わしの家族も癒されていくんじゃから。」

おじいさんの言葉で、ぼくは、ふと我に返った。

それと同時に、おじいさんを失った悲しみが押し寄せてきたんだ。

ぼくはもう一度、目の前に立っているびわの木の自分をみつめた。

そして、そのちょうど胸の辺りに、大きな新しい切り傷があるのに気がついた。

ぼくはその傷が、おじいさんの死によってできた傷だと分かった。

そして・・・その近くには、あと数箇所、

もうずいぶん前についたであろう、同じような傷跡が残っていた。

もしかしたら、ぼくはもう何度もこの世界に生まれながら、同じような体験をしてきたのかもしれない。

もしかしたら、その古傷は、他の誰かの癒されていない傷なのかもしれない。

どちらなのかはよく分からなかったが、もう今のぼくには、どちらでもよかった。

ただ、今のぼくは、その傷に気づいていて、その痛みや悲しみと向き合っている。

今は、それを受け入れて、抱きしめてあげるしかなかった。

それが、今ぼくにできる唯一のことだった。

そしてぼくは、ゆっくりと・・・恐る恐る・・・その傷たちに触れた。

とても冷たかった。

そして、その冷たさを感じた瞬間、

すべてを洗い流すかのように涙があふれてきて、止められなかった。

ぼくは、これまでのすべての感情を吐き出すように、ただただ泣いた。

目の前の傷たちを、優しく撫でながら、涙がかれるまで、ひたすら泣いた。

そんなぼくを、おじいさんがぎゅっと抱きしめてくれた。

ぼくは、あったかいおじいさんの腕にくるまれて、赤ちゃんのように声を出して泣き続けたんだ

。

「大丈夫。ゆっくり・・・ゆっくりでいいから。
長い時間をかけて、ゆっくりとな・・・。
そのために、この世界には、時間というものがあるんじゃから。」

おじいさんの声を遠くに聴きながら、
ぼくは、泣きながら、いつの間にか深い眠りについた。

そして、不思議な夢を見た・・・。

そこは、真っ白な何もない世界だった。

ぼくは、もう・・・びわの木ではなかった。

あの胸の痛みも悲しみも感じていなかった。

そう・・・ぼくは、光そのものだった。

ぼくは、愛されていた。

誰から？

・・・分からない。この何もない世界そのものから・・・だと思う。

それは、自分自身でもあり、もっと大きな何かのような気もした。

ぼくは、深い深い愛に満たされたまま、どんどん広がっていった。

おじいさんとも1つだったような気がする。

空とも、風とも、雲や虹とも、太陽とも、大地に降り注ぐ雨とも、土とも草花とも・・・

すべてと溶け合い1つになったような気がした。

ぼくは、この世界のすべてのものと愛を共有していた。

この世界のものすべてが、そうびわの木のぼくも含めてすべてが・・・

わけ隔てなく、愛に満たされていることに、ぼくは初めて気がついた。

ぼくは、自分を感じながら同時に、愛を感じた。

自分と愛とに違いはなかった。

ぼくは、そのとき、愛そのものだった。

そうか・・・。

ぼくは、ここに存在するだけでいいんだ。

なぜなら、愛そのものだから・・・。

そう思った瞬間、ぼくの内側から、おじいさんの声が聞こえてきた。

「そうじゃよ。

ただ、そこに存在するだけでいいんじゃないよ。

それでも、それを忘れてしまう時もあるだろう。

そのときは、忘れてしまった自分を愛してあげなさい。

楽しいことをいっぱいしてあげなさい。

幸せだなあ・・・と感じることをいっぱいしてあげなさい。

心が求めたことをしてあげなさい。

すべては、

自分がただここに存在している愛そのものなんだということを思い出すためなのだから。

そして、愛の波に帰っていくためなのだから。」

おじいさんの声が、だんだんと遠くなり、
ぼくは、寂しさと一緒にびわの木の体の中で、目を覚ました。

目を覚ましたぼくのからだは、前とは全く変わっていないけれど、
ぼくという心は、何かが大きく変わっていた。

ぼくの中の深い悲しみと痛みは、顕在だったけど、
ぼくは、その悲しみと痛みをぎゅっと握りしめてはいなかった。
そして、そのどちらもぼくを縛り付けてはいなかったんだ。
それは、開いた手のひらの上にただ乗っかっているような、そんな感じだった。
そう・・・ぼくは、その悲しみと痛みから自由になったんだ。

ぼくは、自分もっているものを労わりながら、大きく背伸びをした。

ちょうどそのとき、遠くのほうから、サワサワサワーっと、あたたかい風がやってきたんだ。
その風は、ぼくの枝葉を撫でるように揺らし、通り過ぎていった。
その風は、おじいさんみたいに優しくかった。

ぼくは、久しぶりに　すごく幸せな気分になった。
きっとおじいさんも、夢の中のぼくと同じように、
ぼくらの世界の隅々にまで、愛になって満たしてくれてるんだらうなあ・・・って思って・・・
。

ぼくは、おじいさんのことを思い出しながら、
ぼくたちをやさしく満たし、包み込んでくれている愛を感じてみた。

そして、
ぼくは、そこで感じて受け取ったたくさんの愛を、久しぶりに、大切な実の一つ一つに届けた。
たくさん、たくさん・・・。

実たちは、やっと・・・やっとほんのり色づいた。

その時、ふと土の中の根っこがなぜかとても頼もしく思えた。

初めてぼくは、一人で立っているような気がしたんだ。

ぼくは、心の中が光で満たされているのを感じた。

やっとあの暗闇から抜け出せたようだった。

そして、止まっていた時間がゆっくりと動き出した。

ぼくは、久しぶりに大きく息を吸い込んだ。

だけど、ぼくの体を包み込んでくれた香りは、もう春の香りではなかった。

それでやっと、ぼくは、自分の時間がどれだけ止まっていたかを知ったんだ。

あの時、陽だまりのように丘一面に咲き誇っていた菜の花は、

もう、立派な種をつけていた。

芽を出したばかりだった小さな草花は、

青々とした立派な葉を、誇らしげに広げていた。

いつも眺めていた海は、いつもにも増して、キラキラ銀色に輝いていた。

光が、波の上で踊っているようだった。

空も海も大地も、木も草も花も、動物も人間も・・・

命いっぱい、愛いっぱい到这里生きていた。

それはすべて、本当に美しかった。

そして、ぼくもその中の一人だった。

それで、気がついたんだ。

ぼくは、一人になったけど、一人じゃないんだって。

ぼくの周りにはキラキラ輝く美しい仲間たちがいて、世界がある。

一人で立って、みんなと一つになった・・・そんな感じだった。

ぼくは、この世界にあるものが、キラキラとまぶしくて、嬉しくて、

なぜかまた、涙があふれて止まらなかった。

でも、もうそれは、苦しい涙ではなかった。

すると、そのとき、また遠くから、
あのあたたかい風がやってきて、ぼくの枝葉を優しく愛しそうに揺らしていった。

風の中にまたおじいさんを感じながら、
ぼくは、自分の体の隅々にまで、そう大切な実たちにも、たくさんの愛を届け続ける。

これからもずっと・・・ずっと・・・。

愛の波に帰るまで・・・

=おしまい=

あとがき

平成11年 春・・・祖父は、他界しました。
最後に元気な祖父を見たのは、
たしか就職先の久留米から何の連絡もなく
ふらっと実家に帰った2月末ごろだったと思います。
本当に、ふらっと・・・。
昼間、誰もいない時間に家についた私は、
そのときかわいがっていた猫と一人戯れていました。
・・・実は、その頃、私は仕事も恋愛も、何もかもがうまくいかず、
自分が嫌になっていた最悪のときだったのです。
ただ、家に帰りたい・・・その一心で、
いろんなことを考えながら、車で高速にものらず、
久留米から長崎の実家まで帰ってきたのです。

私が、猫と戯れていると、
祖父がニコニコうれしそうに部屋から出てきました。

「じいちゃん、そがんやせとったっけ？」

「だいぶん、やせてしもうたもんねえ～」

なんて話しながら二人と一匹、静かな時間を過ごしました。
祖父と二人きりでそんな静かな時間を過ごしたのは、
あのときが最初で最後だったかもしれません。
そうして、少し心が和み癒された私は、
父にも母にも、妹にも、祖母にも会わず、また久留米へ帰っていったのでした。

その数ヵ月後、祖父は逝ってしまいました。
祖父のすべてを美化するつもりはありませんが、
私にとって祖父の死は、私の心にたくさんのものを残してくれたのでした。

四十九日がすんだ頃だったでしょうか、
祖母が毎年なる枇杷の実を持ってきてくれました。
例年より、ちょっと大きくて色の濃い枇杷の実でした。
すごく甘くて、びっくりしたのを覚えています。
そして、そのとき、私は祖母から、祖父が久留米で働く私のために、
いつもはしない袋かけをしてくれたのだと聞きました。

そうしてできたのがこのお話の「種」でした。

お話の種は、少しずつ少しずつ育っていきました。

芽を出し、葉を広げ、花をつけるのに、10年以上もかかってしまいました。

その間に私は、久留米の仕事をやめ、

癒しの道に入り、途中いっぱい寄り道をして、再び癒しの道に戻ってきました。

そうそう、おかげさまで結婚も (*^v^*) v。

そして、そこでたくさんの方と出会い、そして・・・、悲しい別れもありました。

アロマのお店を始めてすぐ、

久留米で一緒に働いていた同僚が29歳という若さで大切な人を残して亡くなり、

再び生と死について考えることとなりました。

その数ヵ月後、知り合いの方の息子さんが30歳という若さで突然亡くなり、

残された家族の深い悲しみと痛みが胸が締めつけられました。

「死んだらどうなるのだろう」

「私たちを残して逝ってしまった人たちは、

今どうしているのだろう。」

「どうして生きる人と死ぬ人がいるのだろう・・・」

「わたしは、どうして生きているのだろう。」

「残された人が悲しみ苦しんでいるのを、
残して逝ってしまった人はどう思っているのだろう。」

そんな問いが、私の中にあふれてきたのでした。

そして、それから5年間、

お店をする中でたくさんの方々とお話したり、

自分自身の探求が進んでいくごとに、

自分の中にも、祖父をなくした悲しみのほかに、

もっと深いところに癒しを必要としている何かがあることに気がついたのでした。

そして・・・。

5年前空から降ってくるように出来上がったお話に、

これまでのいろいろな自分の体験と変容と疑問が絡み合い、

やっとやっと、お話が完成しました。

ときどき、このお話は、
自分が書いたとはどうしても思えないときがあります。
本当に祖父からのメッセージのような気がするときがあるのです。
祖父だけではなく、もっと大きな何かからの・・・。
そして、私はこのメッセージを大切な人へ遺したいと思いました。
自分がこちらの世界を旅立つとき、残していく大切な人へ・・・。
それは、随分先のこともかもしれないし、明日のことかもしれない・・・。
それは、わかりませんが・・・。

最後に、このお話しを最後まで読んでくださった皆様に
心から感謝いたします。

そして、これまで私を励まし、導き、支えてくれたたくさんの人にも・・・。

いつも応援してくれて、
たくさんのアイデアと夢をかなえる力をくれたHappy-aromaちゃん、
久留米にいる頃からずっと私を理解してくれていた きみちゃん、
いつも応援してくださる大津家の皆さん、
いつもはらはら、ときどきしながら、心配してくれる実家のみんな、
そして、
やりたい放題の妻を愛を持って許してくれている
最高のパートナーに・・・

本当に、ありがとうございました。
そして、
こんな私ですが、これからもよろしくお願ひします。

by Frankincense